

大

阪に経営者が押し寄せるカリスマカウ
ンセラーがいる。中央区北新町のど
かな中大江公園の横に「オフィスよしおか」
を構える吉岡俊介代表だ。オフィスには毎日
のように悩める経営者やリストラ業務に疲れ
た人事担当マネジャーが訪れる。

ある経営者は部下へのパワハラで社員が定
着しないことを嘆き、吉岡代表のところへや
ってきた。このような人には「気合いだー！」
でついてくる時代ではないことを悟らせ、ゴ
ルフを例に取ってアドバイスを行う。吉岡代
表は「石川遼もウッズも体が柔らかいから飛
距離が出るのです。経営者も頭を柔らかくす
ることで、経営の飛距離を伸ばすことができ
るのです」と話す。

降格や異動に悩む人
事担当マネジャーには、
リストラを受ける側にな
るシミュレーション
を行うと同時に、リス
トラのメリットとデメリットとについてとこ
とん話し合う。

「人は自分にとって嫌なことについては目を
背けたがりません。私のところではその部分の
本音を吐くことで気づきを促すように心がけ
ています。例えば人員整理は一時的なコスト
削減や利益を出すことになりませんが、長期的
に見てどうなのかを直視するのです」と。

◎オフィスよしおか

“涙の癒し”を説く名物カウンセラー



吉岡俊介代表



実は、吉岡代表も会社からリストラされた
経験を持つ。大手損保会社で五〇人近い部下
を持つ課長として働いていたのだが、社内ト
ラブルに巻き込まれたとき、自分に関わりを
持ちたがらない同僚や上司に嫌気がさし、後
先を考えずに辞表を出した。そのときは社内
ではリストラの嵐が吹き荒れており、会社は
引き止めるどころか吉岡代表の辞表を歓迎し
たという。

しかし、吉岡代表を待ち受けていたのは、
娘さんの「お父さんのバカ」
の一言。家族を犠牲にし、社
会的地位を築いてきた男はず
べてをなくしたショックに打
ちひしがれた。家族に初めて
見せる涙がとまらなかった。
その後は何もする気になれず、うつ病になる。
仕事ができないことから車を売り、家財を売
り、マンションから文化住宅に引っ越した。

泣いてナンボ

この状況を救ったのが、同じ職場で知り合
った妻の美奈子さんだった。美奈子さんのす
すめで市民活動に参加し始めたのだ。「ここで
は肩書きを気にすることもなく、安心でした
ね」と徐々に元気を取り戻していった吉岡代
表は、美奈子さんと合作で絵本の製作に取り
かかった。この作品がコンテストに入選し、絵

本作家としての道を歩み始める。題材は皮肉
にも退職の日に家族に見せた「なみだ」だった。

絵本の中で家庭を省みない会社人間として
の自分と直面し、なぜ、会社で人は幸せに働
けないのかを考えるようになった。吉岡代表
は絵本作家の仕事のかたわら、産業カウンセ
ラーの資格を取り、サラリーマンを中心にカ
ウンセリングを行うようになる。その中で、
上司による暴力的なパワハラ事案が多いこと
に気づき、加害者のカウンセリングを受けつ
けたところ、予想以上の相談が寄せられた。

吉岡代表は、この現象について「職場では良
き上司として、家庭では良き父親として、ど
こにいても力を抜くことを許されず、働き続
ける日々。自分自身が誰であるのかを押さえ
込む。そして行き着く先が家族へのDVであ
り、職場でのパワハラなのです。こんなときに
必要になるのが信頼、安心、尊重、感謝、謝罪
の言葉を大切にすること、そして涙を流すこ
とです。特に経営者は強く生きること強い
られていますから、ストレスも半端ではない。
職場や家庭での怒りは暴力では鎮まりませ
ん。でも、涙は怒りを癒してくれます」と語る。
実際、オフィスよしおかで気持ちよく泣い
た経営者は元気を取り戻し、職場へと戻って
いくという。人生の底で涙の力に気づかされ
た吉岡代表は“涙の癒し”を提唱し、各地で
経営者のための講演会を開いている。

なかもり・ゆうと
作家。合同会社関西商魂代表。「辞めてはいけない」(岩波書店)、「関西商魂」(ソフトバンククリエイティブ)、「選客商売」(トランスワールドジャパン)など著書多数。